佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書第９集

中原遺跡群

NASHI NO KI

梨の木

長野県佐久市中込梨の木遺跡発掘調査報告書

1987

佐久市教育委員会
佐久埋蔵文化財調査センター

例　　言

1　本書は昭和62年度佐久市土地開発公社による宅地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

2　調査委託者　　佐久市土地開発公社

3　調査受託者　　佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財調査センター

4　発掘調査所在地籍及び面積

中原遺跡群梨の木遺跡　佐久市大字中込3769、3770-1、3771、3770-2　　2,720㎡

5　調査期間

昭和62年8月19日～8月29日、9月18日～10月23日

6　調査団の構成

事務局

佐久埋蔵文化財調査センター

所　　長　　西沢　正巳

庶務係主査　　畠山　俊彦

庶　務　係　　田中　芳美（臨時職員）

調査団

団　　長　　黒岩　忠男（佐久考古学会副会長）

調査指導者　　林　　幸彦（佐久市教育委員会）

羽毛田卓也（佐久市教育委員会）

調査担当者　　小山　岳夫（佐久埋蔵文化財センター調査係）

調 査 主 任　　羽毛田伸博（佐久考古学会員）

高村博文、三石宗一（佐久埋蔵文化財調査センター）

調　査　員　　篠原　浩江（佐久考古学会員）

調査補助員　　神部　妙子

協　力　者　　和久井義雄（佐久考古学会員）、小林幸子、平林美津江、宮川百合子

地形・地質・石質指導　　白倉盛男（佐久考古学会副会長）

陶磁器鑑定　　原　明芳（長野県埋蔵文化財センター）

7　本書の編集は小山が行い、執筆は第Ⅱ章第1節を白倉盛男が担当した他は、小山が行った。

8　梨の木遺跡のすべての資料は佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

本調査及び報告書作成にあたっては、下記の各氏よりご指導、ご助言をいただきました。記して感謝の意を表します。

臼田武正、島田恵子、堤　隆、花岡　弘、福島邦男、由井茂也（敬称略五十音順）

凡　　例

1　遺構の記述については、検出位置⇨検出層序⇨重複関係⇨平面形態⇨覆土⇨付属施設⇨遺物の出土状態⇨その他の観察事項の順序で記載することを基本とした。

2　遺構の略称

竪穴状遺構⇨Ｔａ、土坑⇨Ｄ、溝状遺構⇨Ｍ、柱穴址⇨柱

3　水糸レベルについては各遺構毎に統一し、標高は縮尺尺度の上に明記した。

4　縮　　尺

竪穴状遺構⇨1/40、土坑⇨1/60、溝状遺構⇨1/60、柱穴址⇨1/60、貨幣⇨1/1

5　遺構実測図に用いた斜線のスクリーントーンは地山をあらわす。

目　　次

例　　言

凡　　例

第Ｉ章　発掘調査の経緯……1

第１節　発掘調査に至る動機……1

第２節　調査日誌……2

第II章　遺跡の立地と環境……2

第１節　自然環境……2

第２節　歴史的環境……4

第III章　基本層序……6

第IV章　遺構と遺物……7

第１節　検出遺構遺物の概要……7

第２節　竪穴状遺構……9

1)　第１号竪穴状遺構……9

第３節　土　　坑……9

1)　第１号土坑…9　2)　第２号土坑…12

3)　第３号土坑…12　4)　第４号土坑…13

5)　第５号土坑…13　6)　第６号土坑…14

7)　第７号土坑…14　8)　第８号土坑…14

9)　第９号土坑…16

第４節　溝状遺構……16

1)　第１号溝状遺構……16

2)　第２号溝状遺構……16

第５節　柱穴址……16

1)　第１号柱穴址……16

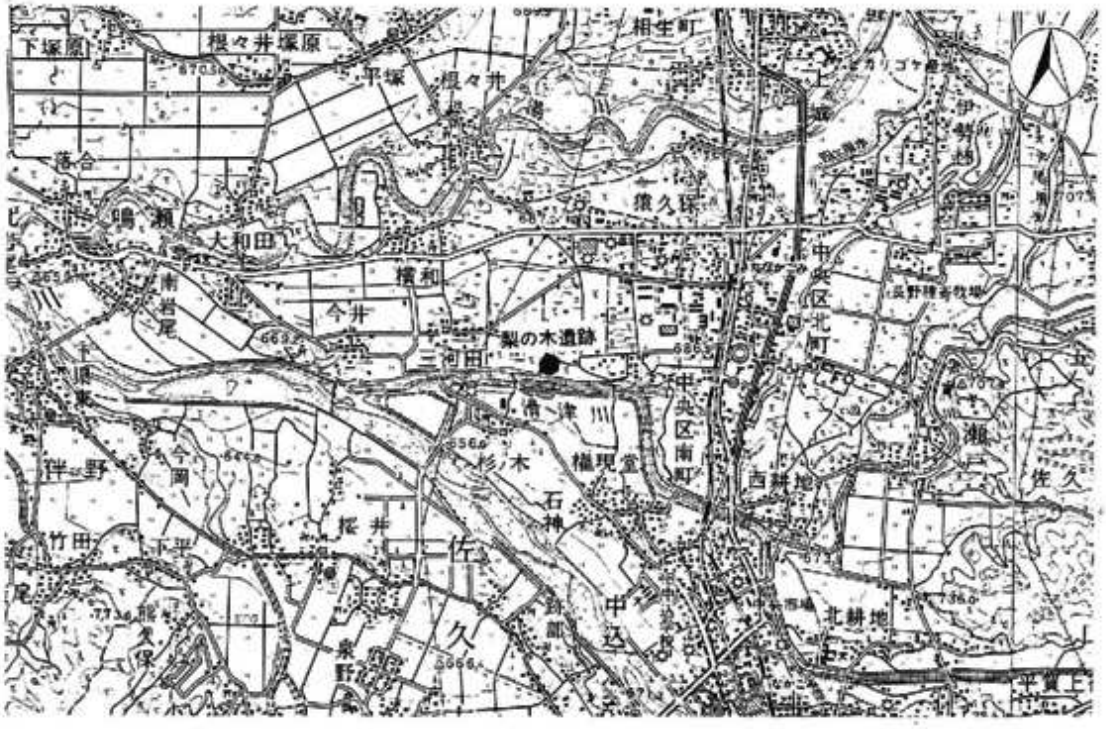
第Ｖ章　調査のまとめ……17

第Ⅰ章　発掘調査の経緯

第１節　発掘調査に至る動機

中原遺跡群梨の木遺跡は佐久市中込に所在し、千曲川の支流滑津川右岸の切り立った段丘上に立地する。遺跡群内には南西端に佐久市内で最大規模を誇る三河田大塚古墳が南側に開口して存在し、また、昭和58・59年に行われた佐久市遺跡詳細分布調査では縄文～中世にかけての遺物が表面採集されている。以上のことから、梨の木遺跡の今次調査地区からは、古墳に関連する諸施設、あるいは縄文～中世の遺構の存在が予想された。

昭和62年度、佐久市土地開発公社によって宅地造成事業が本遺跡内において計画されたため、遺跡の破壊が余儀なくされる事態となった。そこで佐久市教育委員会が佐久市土地開発公社より委託をうけ、佐久市教育委員会から委託をうけた佐久埋蔵文化財調査センターが試掘調査を実施し、遺構の存否を確認することとなった。その結果、時代性は判然としないものの、竪穴状遺構１基、土坑９基、溝状遺構２基、柱穴址１基が検出され、再協議の結果、本調査を行い記録保存をはかる運びとなった。



第１図　梨の木遺跡の位置（１：50,000 国土地理院地形図による）

第２節　　調査日誌

昭和62年８月19日㈬～８月21日㈮（試掘調査）

重機を搬入し、表土の除去作業を開始する。まず、調査区の周囲に幅２ｍ程のトレンチを設定し、遺構の存在確認にとりかかる。その結果、遺構らしき落ち込みが確認できた南端地区を拡張し、遺構群の広がりの追及を行う。拡張区から検出された遺構は竪穴状遺構１基、土坑９基、溝状遺構２基、柱穴址１基におよび、再協議の結果、本調査を実施することとなる。

８月24日㈪

拡張地区の精査およびプラン確認作業を行う。

8月25日㈫～８月27日㈭

検出された遺構群の掘り下げを行う。

８月28日㈮～８月29日㈯

遺構群の掘り下げ、セクション図、平面図、エレベーション図等の図面作成を行う。８月28日には全体図作成、８月29日には全景撮影、器材徴収を行い調査を終了する。

９月18日㈮～10月23日㈮

報告書作成作業を行い全調査を完了する。

第II章　　遺跡の立地と環境

第１節　　自然環境（地形と地質）

梨の木遺跡は佐久平の中心部佐久市大字中込字梨の木にある。

佐久平は千曲川の上流沿岸平地で標高700m附近を中心として、北は小諸市、南は南佐久郡佐久町を長軸として南北約18km、東西は佐久市中心部で幅約10kmの長菱形をしている。この長菱形の長い対角線上を千曲川が北に向って流れており、短い対角線は佐久市地域にあり幅としては最も広い部分にあたっている。東側には佐久山地の荒船山（1422m）を主峯とし兜岩山、物見山、八風山等が南北に連なり群馬県との分水嶺県界を作っており妙義荒船佐久高原国定公園となっている。西側は八ケ岳蓼科山の2500m以上のホッサマグナ内に噴出した富士火山帯の高峰が南北にならび諏訪地方との境界をなして、これも八ケ岳中信高原国定公園となっている。佐久平は古来から交通の要地にあたり、わが国の東西交通路である東山道・中仙道・中山道、日本列島縦貫道路としての北国街道・善光寺街道・佐久甲州街道等の通過地であった。従って周辺山地には多くの峠路が開かれていた。東の碓氷峠・香坂峠・内山峠・田口峠・余地峠・十石峠、西の麦草峠・大

石峠・大河原峠・雨境峠・大門峠などがその代表である。

佐久平と総称しているが、地質学的成因については南北二区分に別れている。境界線は志賀川が滑津川下流と合流して千曲川に注ぐ東西線を境として滑津川河床で標高650m、北岸段丘上で680m、比高30mの断崖が続いている。これは旧南北佐久郡境でもあり、南部を野沢平、北部を岩村田台地と明らかな相違を見せている。昭和36年この郡界を越えて東村・浅間町・中込町・野沢町の一村三町が合併して佐久市として誕生したわけで、佐久市が佐久平の中心部を占めている。

南部野沢平は主として千曲川の氾乱原沖積地と内山川の谷口扇状地で全体的には河床礫層と沖積粘土層地帯で地下水位も高く、用水も古くから拓かれて安定し土地肥沃なために水稲多収穫地帯である。

北部は中込原から岩村田中佐都地区で浅間火山の山麓末端の台地状平地で基盤には浅間火山第一次外輪山黒斑山の大噴火による塚原泥流が中佐都附近で流れ山を百余形成しており、その上部へは第二次外輪山前掛山の長期の活動に基く追分第一軽石流（P_1）が厚く被っている。この層は厚い部分は20～30mの層厚を示し軽石と火山砂火山灰で構成されており新期火山噴出堆積層のために風化も進まず凝結力も弱いために雨水による浸蝕がはげしく、流水による浸蝕谷〝田切り地形〟が見事に発達し、御代田から岩村田地区まで、西部は小諸懐古園附近まで深い垂直の谷を形成している。この田切り地形の谷底は常時地下水が湧出しており、弥生時代から最初に稲作が行われたであろうと考えられている部分でもある。このP_1層の地表面には凸凹もあり湯川を堰き止めた湿地にその後の火山灰砂、流入軽石礫が堆積したものが所謂新期の〝湯川層〟として上面を覆っている。これらの地層が佐久平北半の堆積層序となっており、特に中込原附近では地下水層は極端に低く生活用水が得られなかったために佐久市が誕生して市役所が新築され、佐久水道が新設されるまでは人家もなく桑畑、野菜畑のみであった。

梨の木遺跡は中込原段丘上の滑津川沿いの末端の遺跡で発掘によって黒色表土層（全体層序第Ⅰ層）30～40cm、ローム層（第Ⅱ層）20cmそれより下部は湯川層湿地堆積層（第$Ⅲ_a$～$Ⅲ_c$層）で2.5mまでは確認されたが下底面は未確認である。

（白倉　盛男）

第２節　　歴史的環境

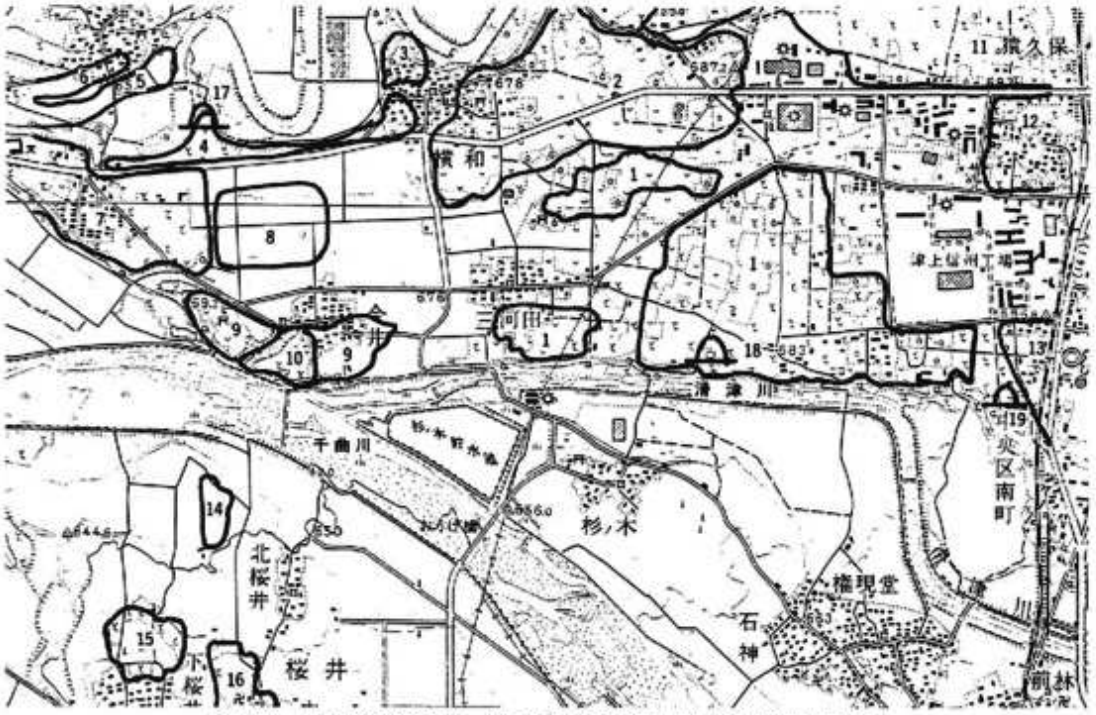
中原遺跡群は滑津川と湯川にはさまれた東西に細長い台地上にあり、南北700m、東西1,600mの広さを有する佐久市内でも広大な面積を誇る大遺跡群である。滑津川右岸に位置する遺跡群内の南西端に位置する県史跡三河田大塚古墳は、墳丘高約５m、墳丘径30m、玄室は長さ約6.3m、巾約2.1m、高さ2.9mの佐久地方では最大規模の横穴式石室をもつ古墳で６世紀後半～７世紀前半に築造されたものと考えられている。この三河田大塚古墳の存在以外、中原遺跡群では発掘調査によって周知された遺跡がなく、昭和59年度佐久市遺跡詳細分布調査によって縄文～中世各期にわたる遺物が表面採集されたものの、実態は謎に包まれていた。今回の発掘調査はその意味で中原遺跡群の解明の手掛りとなるものであり、期待が高まる。

中原遺跡群を取り巻く周囲の遺跡概況は第２図、第１表に示した通りで、滑津川右岸の中原遺跡群と同じ段丘上に大規模な遺跡群が密集した状態で存在し、湯川に面する台地の北側には、白山遺跡群(７)、今井西原遺跡(８)、寄塚遺跡群(４)、宮の上遺跡群(２)、寺畑遺跡群(11)、西妻神遺跡群(12)など、滑津川に面する台地の南側には本遺跡群(１)の他、今井宮の前遺跡(９)、大塚遺跡群(13)、深堀遺跡群など弥生～平安時代を中心とする大きな集落遺跡群が展開されている。但しこれらの遺跡群にしても発掘調査された例に乏しく、僅かに今井西原遺跡(８)が昭和49年度の一部調査で小型器台など古墳時代前期後半と考えらる佐久市内では調査例の少ない良好な土器群を出土した住居址２軒、古墳時代後期～平安時代と考えられる遺物を出土した住居址５軒の検出例が知られるのみである。また、古墳は先述の三河田大塚古墳(18)の他、寄塚古墳(17)、蟹ケ沢古墳(19)などが単独で散在する。いずれも横穴式石室をもつ後期古墳で、三河田大塚、蟹ケ沢古墳が滑津川、寄塚古墳が湯川沿いに面して立地している。以上、中原遺跡群とそれを取り巻く遺跡群が存在する当台地上については未解明な部分に支配されている感が強いが、当台地と滑津川および千曲川をはさんで南側に対面する杉ノ木、権現堂および桜井地区などの千曲川・滑津川の影響力を直接被る地域に比べると、弥生時代遺跡の密度が遙かに濃密である可能性が強いことは、佐久市遺跡詳細分布調査の結果からも明らかである。従って、当台地においては、弥生時代をはじめとする巨大な集落址が内包されていることは想像に難くなく、今後の調査に多大な期待が寄せられる地域であることは言うまでもない。

参考文献

佐久市教育委員会　1975　『今井西原』

佐久市教育委員会　1984　『佐久市遺跡詳細分布調査報告書』



第２図　周辺遺跡分布図（１：25,000 国土地理院地形図による）

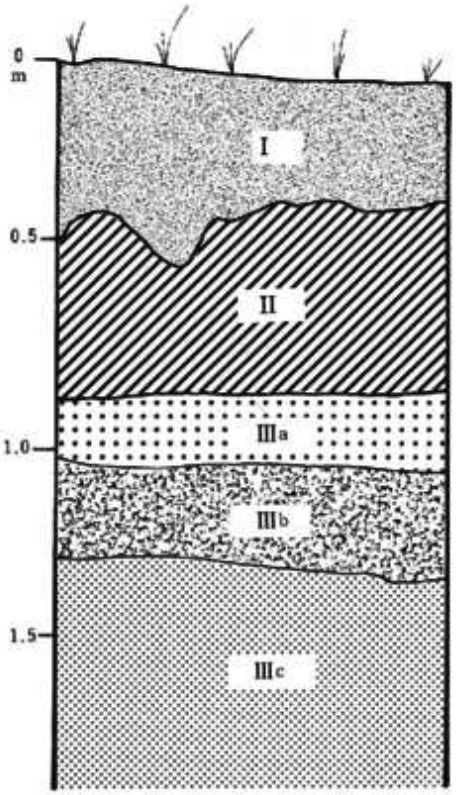
第１表　周辺遺跡一覧表

No.	住分No.	遺跡名	所在地	立地	時代 縄	弥	古	奈	平	中	備考
1	241	中原遺跡群	中込字梨の木・大塚他、今井字大塚他 横和字下土蔵他	2段丘	○	○	○	○	○	○	本調査　梨の木遺跡
2	240	宮の上遺跡群	横和字宮の上・一本松・湯の上・高根他	2段丘	○	○		○	○		昭和50年度　一部調査 高根遺跡
3	233	北久保遺跡	横和字北久保	1段丘			○	○	○	○	
4	231	寄塚遺跡群	横和字寄塚・鶴巻	2段丘		○	○	○	○	○	
5	227	大和田遺跡群	鳴瀬字大和田他	1段丘	○	○	○				
6	226	大和田屋敷遺跡群	鳴瀬字屋敷他	1段丘		○	○				
7	230	白山遺跡群	鳴瀬字白山・冷間 三河田字下原	2段丘	○	○	○	○	○		
8	234	今井西原遺跡	今井字九反田他	2段丘			○	○	○		昭和49年度　一部発掘調査
9	235	今井宮の前遺跡	今井字宮の前他	2段丘					○	○	
10	236	今井城跡	今井字城・前田	2段丘						○	
11	107	寺畑遺跡群	横和字寺畑・山下他 北久保字下原・前原他	2段丘		○	○	○	○		
12	247	西妻神遺跡	中込字西妻神	2段丘		○			○		
13	249	大塚遺跡群	中込字大塚・西大塚・立石他	2段丘		○			○		
14	323	上北谷遺跡群	桜井字上北谷・八反田	1段丘			○				
15	321	北畑遺跡群	桜井字北畑・東畑	1段丘		○	○	○	○		
16	322	宮前遺跡群	桜井字宮前・北西・東	1段丘		○	○	○	○		
17	239	寄塚古墳	横和字寄塚592	2段丘			○				
18	244	三河田大塚古墳	三河田字大塚414－5	2段丘			○				
19	245	蟹ヶ沢古墳	中込字蟹ヶ沢3541－35、3541－34	2段丘			○				

第Ⅲ章　基本層序

梨の木遺跡は千曲川の支流、滑津川右岸の切り立った断崖上に立地しており、標高は680m内外を測る。梨の木遺跡を含む三河田地区一帯は浅間山黒斑火山の墳出物・追分第一軽石流（Ｐ１）の被覆する地域としては最も南端にあたり、この地域を境として、南側にあたる中込・平賀・野沢などの各地区の土壌は強粘土質に一変する。

遺跡の基本的な層序を概述すると第３図に示したようになるが、最も注目すべきは第Ⅱ層火山灰層下に、湯川層とされる水平な砂層（第Ⅲa～Ⅲc層）の堆積があり、湯川の影響がこの地域にも及んでいることである。今回の調査で検出された遺構は大方が第Ⅱ層上面で確認することができ、その掘り込みは第Ⅲa～Ⅲc層・砂層にまで達していることが多かった。また、遺構覆土は第７号土坑、第１号溝状遺構以外は耕作土に近似する土で形成されており、中世以降の構造物が主体を占める遺跡であることは明らかである。



（層序説明）

第Ⅰ層　オリーブ褐色土　2.5Y4/3
きめの非常に細かい、ローム・砂粒を多量に含み、主体土もきめ細かくもろい。　耕作土

第Ⅱ層　明黄褐色土　2.5Y6/8
φ３～30㎜の軽石を多量に含む。火山灰主体で粘性は弱い。　火山灰層

第Ⅲa層　黄灰色土　2.5Y6/1
きめ細かい砂粒ときめの粗い砂粒が水平に堆積し、φ５～30㎜の礫と軽石が多量に含まれている。

第Ⅲb層　明黄褐色土　2.5Y6/8
Ⅲa層よりも砂粒がきめ細かくなり、軽石もあまり含まない。

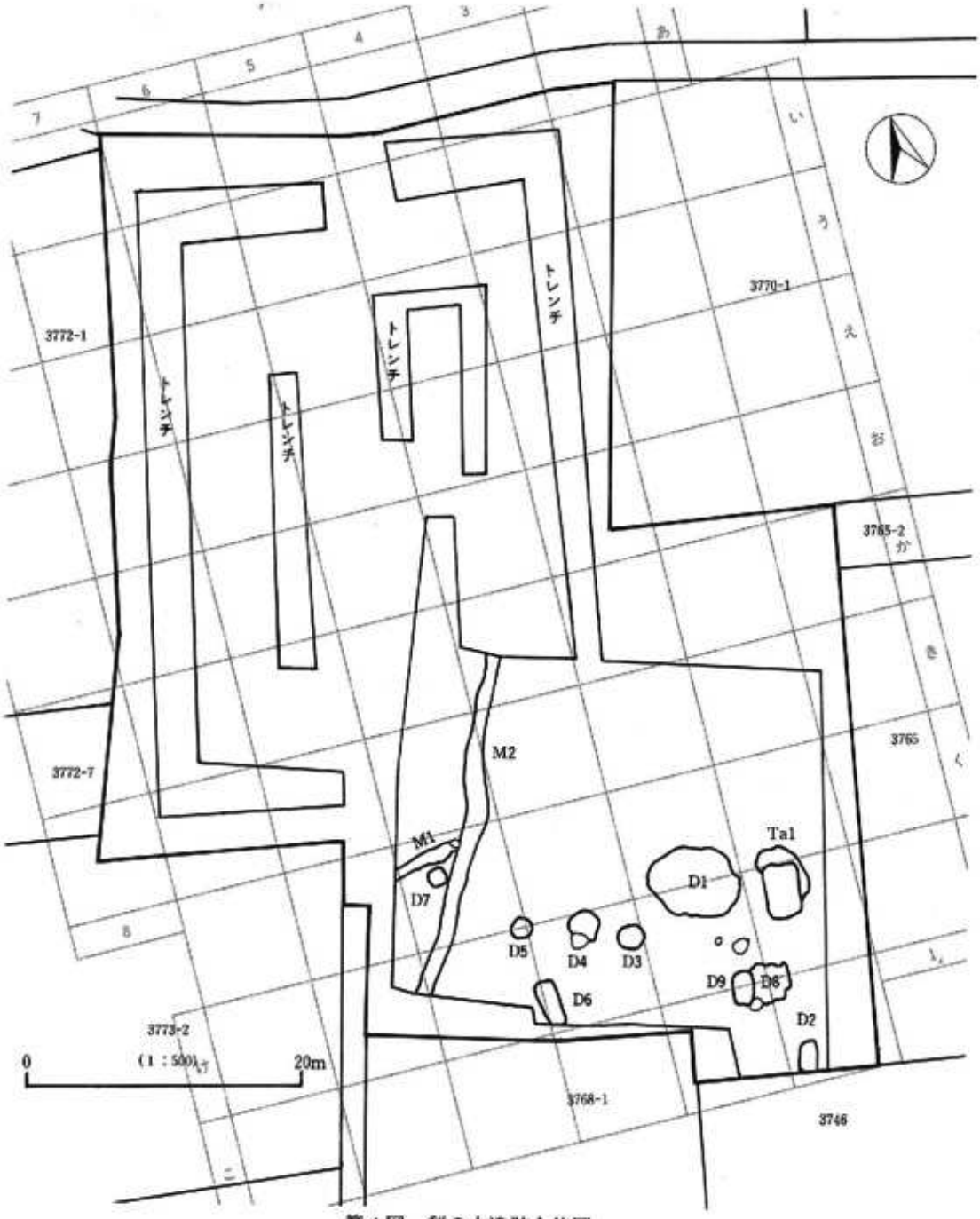
第Ⅲc層　明黄褐色土
Ⅲb層と酷似するが軽石がやや大ぶりである。

湯川層

第３図　基本層序模式図

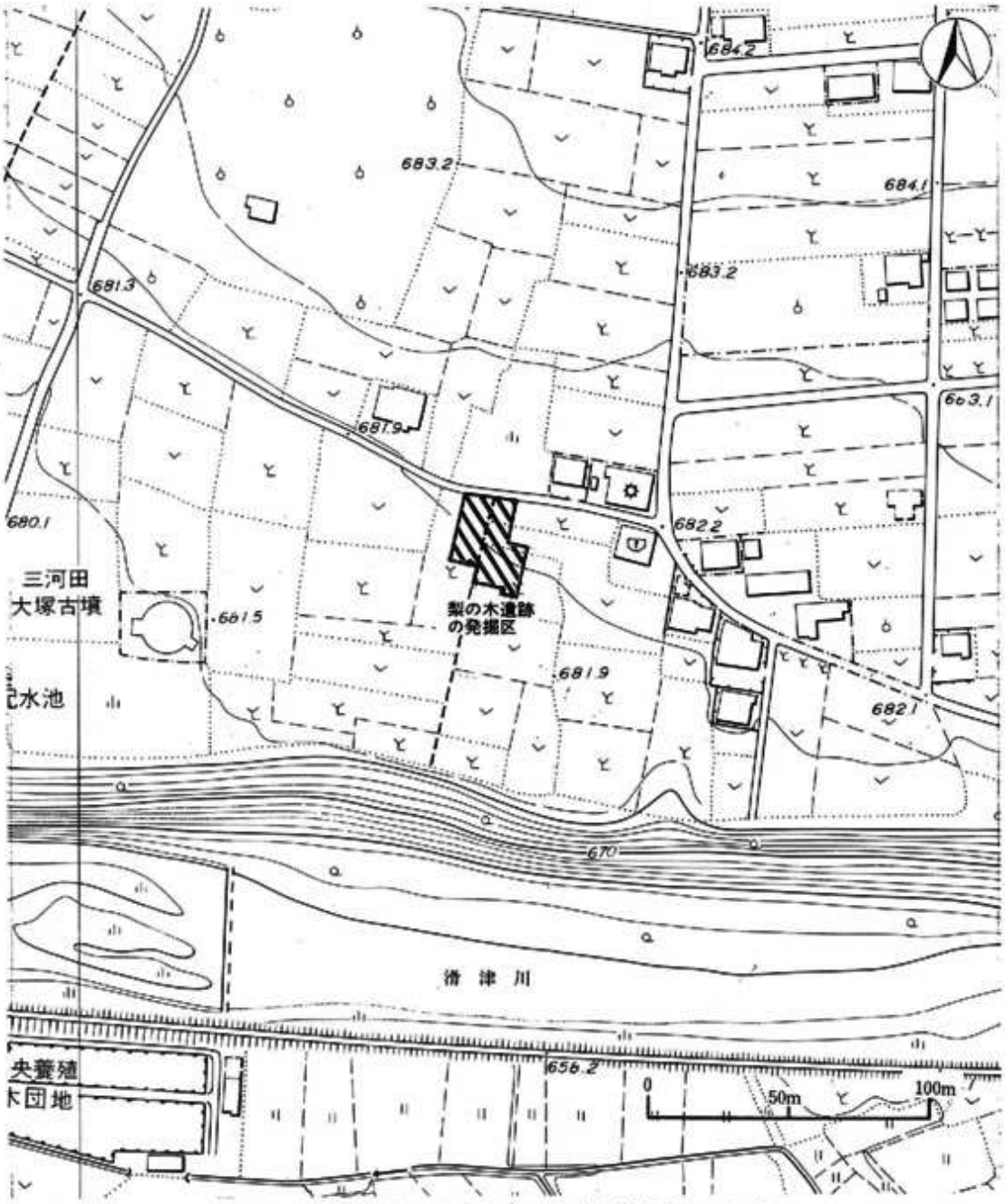
第IV章　遺構と遺物

第１節　検出遺構・遺物の概要



第４図　梨の木遺跡全体図

遺　構	竪穴状遺構……1基	土　坑……9基
	溝状遺構　……2基	柱穴址……1基
遺　物	中世陶磁器、弥生土器、北宋銭、人骨（?）	



第5図　発掘区設定図（1：2,500 佐久市基本図20による）

第2節　竪穴状遺構

1）第1号竪穴状遺構

遺構（第6図、図版　二）

本遺構は調査区の南東、く・け－1・2グリッド内に位置し全体層序第II層黄褐色ローム層上において確認された。他遺構との重複関係はもたない。

平面プランは南北の長軸長317cm、東西の短軸長188cm、東壁長278cm、西壁長286cm、南壁長156cm、北壁長171cmのやや隅の丸い長方形を呈し、長軸方位はN－8°－Eをさす。

覆土は大方が砂層と耕作土に酷似する土からなり、人為的に埋め房された状況が看取された。

確認面からの壁高は張り出し部の付設される東・北壁で61.5～96cm、東・南・西壁で81.5～108.5cmをはかる。壁面は地山第II・III層が丁寧に削り取られ、平滑な面を形成しているが第III層は砂層であるため、崩落し易く、本遺構が建物址である場合、補強材が必要となる。

底面は地山第III層の砂層をそのまま利用して構築され、平担ではあるが、叩きしめられたり、踏みしめられた痕跡は認められず、一様に軟弱である。

付属施設は底面中央南東寄りの東壁下に接して124×121cmの円形土坑が9cmの深さで掘り込まれている他、この土坑の南西部分から接続して南西コーナー下に続く、幅35cm内外、深さ9cm内外の溝が検出された。また、東壁北半から北壁の外縁部にかけては幅75cm内外の半楕円状の緩やかな傾斜をもつ掘り込み（張り出し）がみられる。この掘り込みは長方形の竪穴部分が埋没する以前に埋め戻されたことは明らかで、本遺構に確実に付属する施設とは言い切れないが、大井城跡などの竪穴状遺構に同様な張り出し部をもつ形態がみられるため、ここでは竪穴に付随する可能性のあるものとして併載した。遺物は全く検出されなかったため、本遺構の時期は明確でない。

第3節　土　坑

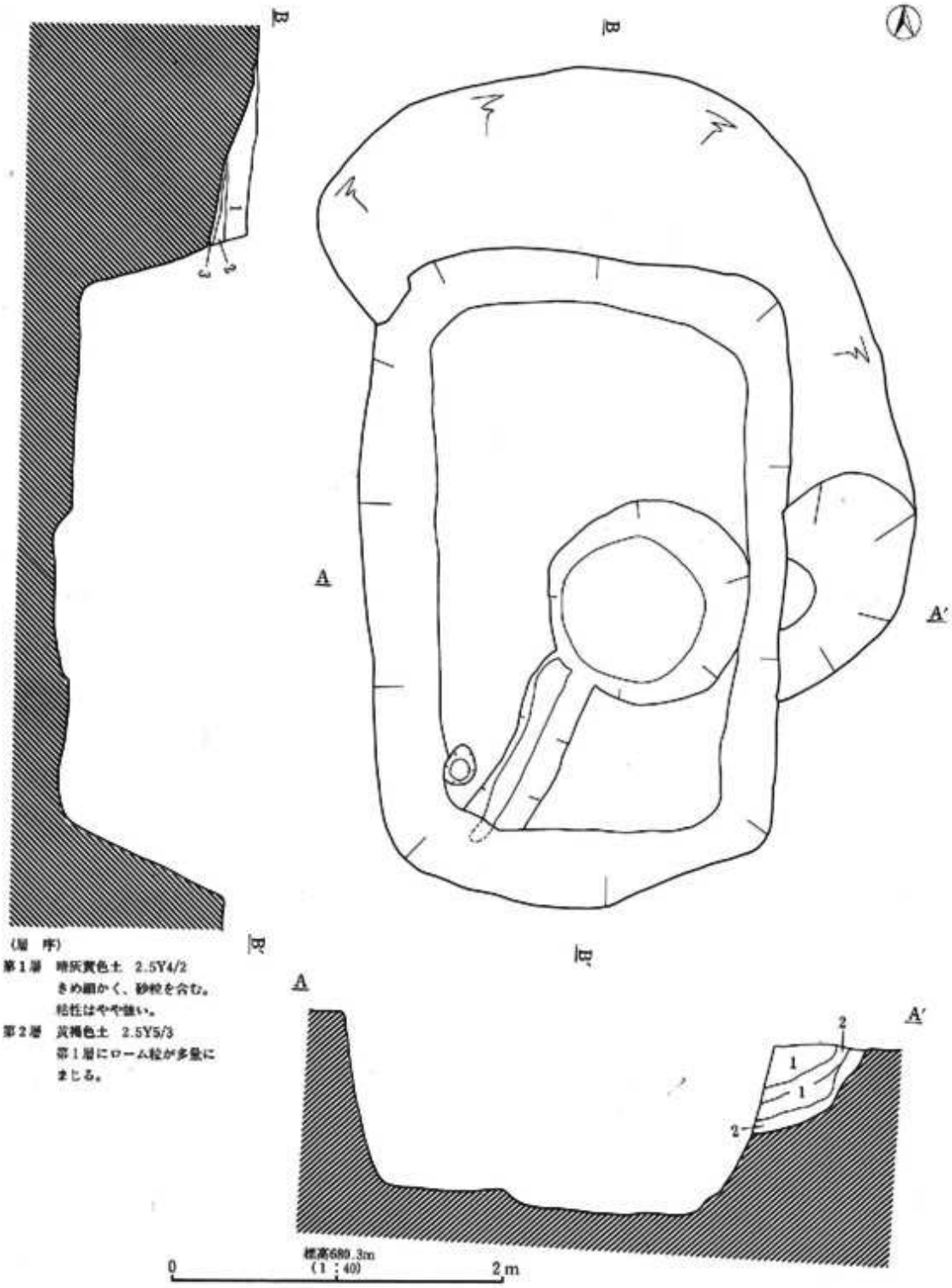
1）第1号土坑

遺構（第7図、図版　二）

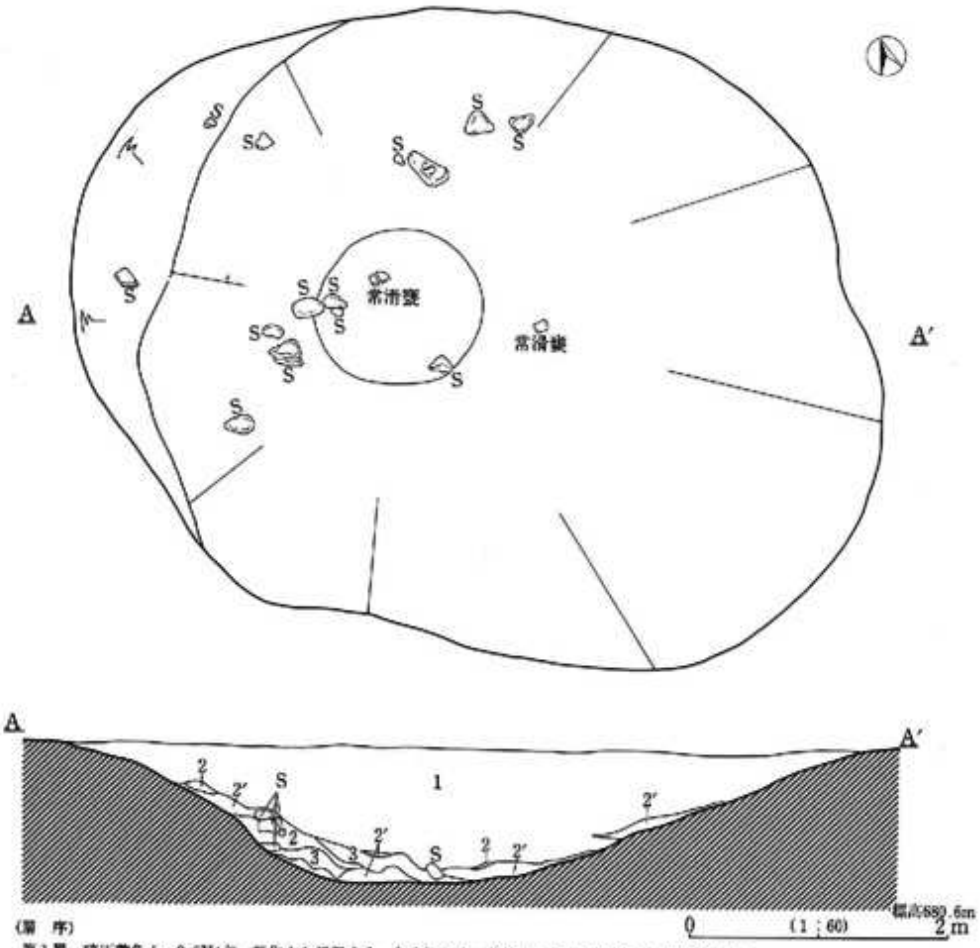
本土坑は調査区の南東く・け－3グリッド内に位置し、全体層第II層上において確認された。重複関係はない。

平面プランは長軸長683cm、短軸長480cmの楕円形を呈し、長軸方位はN－47°－Wをさす。

確認面からの深さは最深部で103cmをはかり、断面形は底面がやや丸みを帯びるものの、おおむね逆台形状を呈する。土坑側面、底面は地山第III層を利用しており、平滑に削り取られている。



第6図　第1号竪穴状遺構実測図



(層　序)
第1層　暗灰黄色土　2.5Y4/2　耕作土と近似する。きめ細かく、砂粒・パミスを少量含み、粘性は弱い。
第2層　明黄褐色土　2.5Y6/6　ローム主体で粘性はやや強い。
第2′層　オリーブ褐色土　2.5Y4/3　第1層と第2層が入り混じっている。
第3層　黄灰色土　2.5Y5/1　第1層に似るが、きめ細かくもろい。

第7図　第1号土坑実測図

覆土は大別三層に分かれるが、遺構内の大部分は第1層の暗灰黄色土が被覆し、側面、底面に密着する状態で第2・2′・3層（ロームブロックあるいはロームがまじる層）が堆積している。

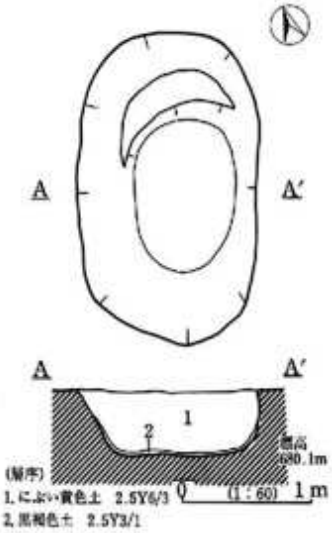
遺物及び礫の分布は概して散慢であるが、側・底面近くの第2・2′・3層中により集中する。礫は比較的多く89個あり、熱を受けたものが多い。滑津川系の玄武岩、溶結凝灰岩、玢岩、千曲川系の輝緑凝灰岩、安山岩（塩基性と酸性）、地山第Ⅲ層・湯川層中に含まれる浮石、砂岩からなり、明らかに身近な場所から採集したものと言える。遺物は国産陶器の常滑甕が8片、瀬戸美濃系天目茶椀が1片、古瀬戸灰釉瓶子？が1片、また、常滑系甕1片、唐銭「開元通宝」15－2、1点が出土している。これらの遺物は15世紀代と考えられ、本土坑内からこれ以降の年代を示す遺物が出土していないことから、土坑構築時期も15世紀に近いものと考えられる。性格については不明である。

2）第2号土坑

遺構（第8図、図版　三）

本遺構は調査区の南東端、こ－2グリッド内に位置し、基本層序第II層上において確認された。

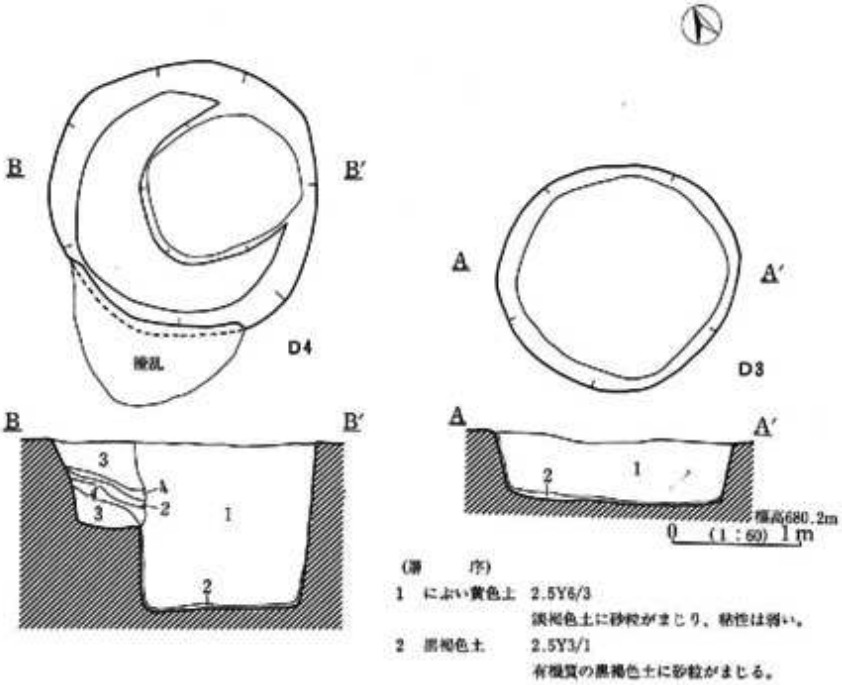
平面プランは長軸長240cm、短軸長139cmの楕円形を呈し、長軸方位はN－15°－Eをさす。覆土は2層からなり、第1層は耕作土に近いにぶい黄褐色土、第2層は有機質の黒褐色土である。第2層は土坑底面、側面に密着した状態で極めて薄く堆積しており、木質棺が存在したことも想定できる。深さは最深部で48cmを測り、断面形は逆台形を呈する。遺物は検出されず、所産期は判断できない。



第8図　第2号土坑実測図

3）第3号土坑

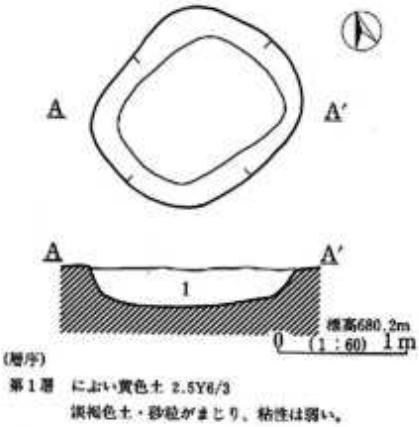
遺構（第9図、図版　三）



第9図　第3・4号土坑実測図

本遺構は調査区の南側、け－3・4グリッド内に位置し、全体層序第II層において確認された。

平面プランは長軸長198cm、短軸長174cmの楕円形を呈し、長軸方位はN－77°－Wを示す。覆土は二層からなり、堆積状態は第2号土坑と同様である。深さは最深部で47cmを測り、断面形は逆台形を呈する。遺物は検出されず、所産期は判断できない。



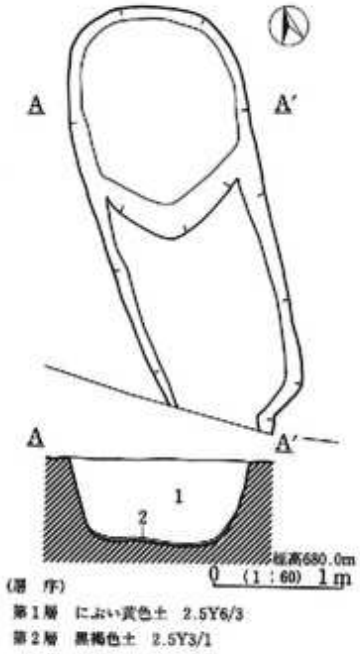
第10図 第5号土坑実測図

4）第4号土坑

遺構（第9図、図版 三）

本遺構は調査区の南側、け－4グリッド内に位置し、全体層序第II層上において確認された。現代の耕作によって南西側の上部を破壊されている。

形態は212×205cmのほぼ円形を呈する掘り込み内の北東側に139×110cmの隅丸長方形（長軸方位はほぼ東西を向く）を呈する、更に深い掘り込みをもつ2段構築となっている。深さは1段目で71cm、2段目で126cmを測る。底面はいずれも平担であり、立ち上がりはほぼ垂直に近い。覆土は浅い掘り込み部分は第3・4層、深い掘り込み部分は大方が耕作土に近い第1層で充塡されているが、底面、側壁には密着した状態で有機質の黒色土の薄い堆積が確認面上にまで一様に見られることから樽形の木質棺が埋納されていたことが想定できる。一方、浅い掘り込み部分はローム層がベースとなる第3・4層の堆積が交互に繰り返し行われている。この堆積の流れが確認面へ向って垂直に認められる、有機質の黒色土第2層を境として明確に止揚されていることから、木質棺埋納後に埋め没された堆積状況と理解することができる。以上のような堆積状態から人骨は遺存していないものの本土坑は埋葬に使用されたものと理解することが妥当である。また、出土遺物がなく時期判定はできない。



第11図 第6号土坑実測図

5）第5号土坑

遺構（第10図、図版　三）

本土坑は第４号土坑に隣接する、く・け－４・５グリッド内から検出された。平面形態は156×142cmの隅丸方形を呈し、長軸方位はN－64°－Eをさす。確認面からの深さは最深部で28cmを測り、断面形は底面がやや丸く鍋底状を呈する。覆土はにぶい黄褐色土１層のみである。
出土遺物がなく、性格、時期については判然としない。

６）第６号土坑

遺構（第11図、図版　三）

本遺構は調査区の南端中央、け－４・５グリッド内に位置している。プラン南側が調査区外にあたるため全容は不明であるが、長軸長は350cm以上、短軸長134cmをはかるかなり細長い南西部にくびれをもつ長方形を呈する土坑である。長軸方位ははほぼ南北を向くと考えられる。プラン内北側には180×137cmの楕円形を呈する（長軸方位はN－4°－W）更に深い掘り込みをもち、２段構築となっている。深さは深い掘り込み部分で67cm、浅い掘り込み部分で55cmを測り、断面形はいずれも底面が平担な逆台形を呈する。覆土は二層からなり、構成土・堆積状態は第４号土坑などと酷似するため、墓址と性格付けることもできる。出土遺物はなく、時期判定できない。

７）第７号土坑

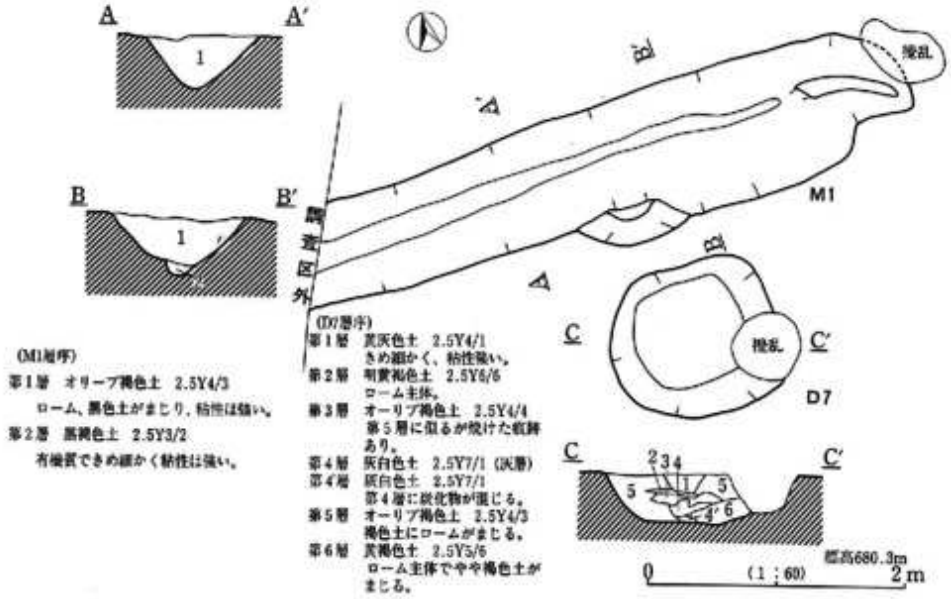
遺構（第12図）

本遺構は調査区の南側の中央、く－５グリッド内に位置している。東側は攪乱されている。平面プランは131×119cmの隅丸方形を呈し、長軸方位はN－83°－Eを示す。深さは最深部で38cmを測り、底面は鍋底形を呈する。覆土は最終埋没土の黄灰色土（第１層）、ローム粒混じりかローム主体の第２・３・５・６層、これらの土層に包み込まれている灰層（第４層）からなる。灰層の直上に薄い堆積を示す第２層は焼け込んだと考えられる痕跡が認められるが、坑内で火を燃やす行為が行われたか否かは定かでない。遺物は覆土の上層部、特に第１層に集中する。15－３～13はいずれも弥生土器の破片で３は無文の深鉢、４～13は櫛描斜走直線文が施される甕である。これらの遺物から本土坑は弥生時代中期の所産と考えられる。

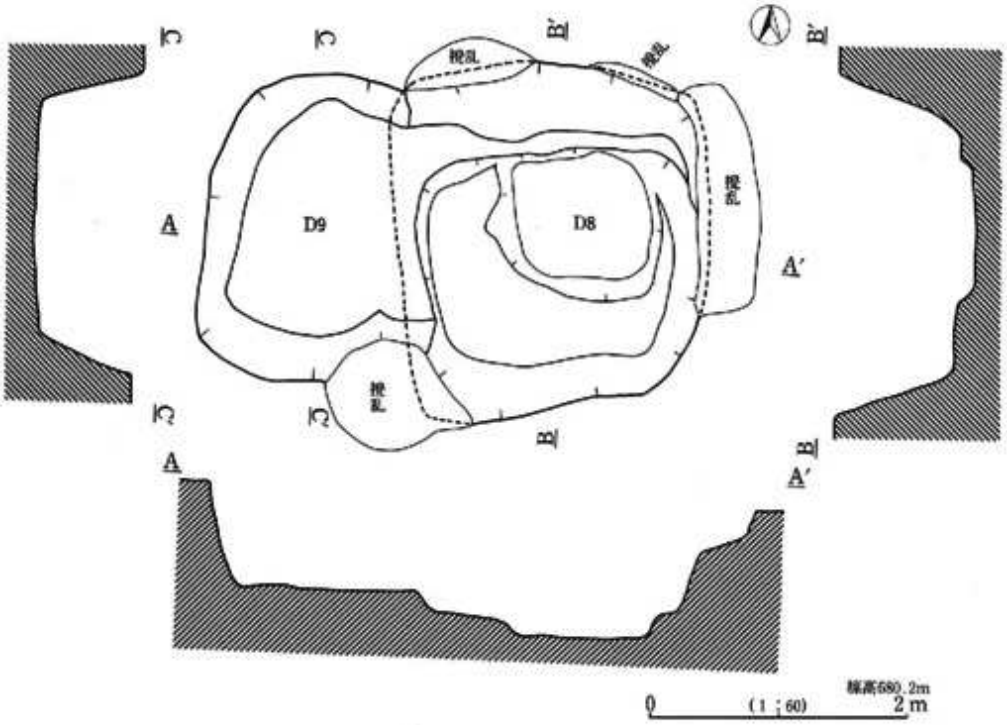
８）第８号土坑

遺構（第13図）

本遺構は調査区の南東側、け・こ－２・３グリッド内に位置し、第９号土坑と重複して検出された。新旧関係は第８号土坑の方が新しい。プランは東西の短軸長(241)cm、南北の長軸長264cmの方形を呈し（長軸方位N－6°－W）、このプランの南東に片寄る位置に(218)×192cmの方形の掘



第12図　第７号土坑、第１号溝状遺構実測図



第13図　第８・９号土坑実測図

り込みがあり、更にこの掘り込みの北東側に136×116cmの方形の掘り込みがなされ、全体では3段構築の土坑となっている。確認面からの深さは、1段目で79cm、2段目で97cm、3段目で108cmを測り、底面はいずれの掘り込みも平担である。覆土はおおむね第2・4号土坑と同じ土からなり、堆積状態も近似する。出土遺物はなく、時期判定はできない。

9）第9号土坑

遺構（第13図）

本土坑は調査区の南東、け・こ―2・3グリッド内に位置する。重複する第8号土坑に東側を破壊されている。プランは東西の短軸長184cm、南北の長軸長240cmの隅丸長方形を呈し、長軸方位はN―12°―Eを示す。確認面からの深さは最深部で79cmを測り、底面はおおむねフラットである。出土遺物は無文の素焼きの土器片が1点のみあるが、所産期は不明確である。土坑の時期・性格についても判然としない。

第4節　溝状遺構

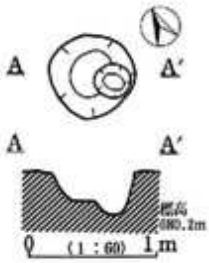
1）第1号溝状遺構

遺構（第12図）

本遺構は調査区の南側、け―5グリッド内から検出された。検出長474cm、幅77～104cmを測る東西方向に直線状に横走する溝で調査区外の西側にまで更に長く伸びていることが予想される。確認面からの掘り込みは40cm内外を計測し、断面形はおおむね「V」字形を呈する。覆土は大方がロームと黒色土まじりの第1層からなるが、東側の底面（先端部）には有機質の黒褐色土が堆積している。遺物は検出部の中央、底面より僅かに浮いた位置から人骨？が出土している。

2）第2号溝状遺構

本遺構は調査区の南側の中央部、か・き・く・け―4・5グリッド内から検出された。検出長12.5m、幅60～80cmを測る南北に縦走する溝で、部分的に僅かな蛇行がみられるものの、おおむね直線状に伸びている。断面形は緩い「U」字形を呈し、深さは20～30cmを計測する。覆土は耕作土からなるため、極く現代に構築されたものと理解される。混入遺物は、15―14・15の弥生土器があり、櫛描斜走直線文が施されることから弥生中期の所産と考えられる。



第14図　第1号柱穴址実測図

第5節　柱穴址

1）第1号柱穴址

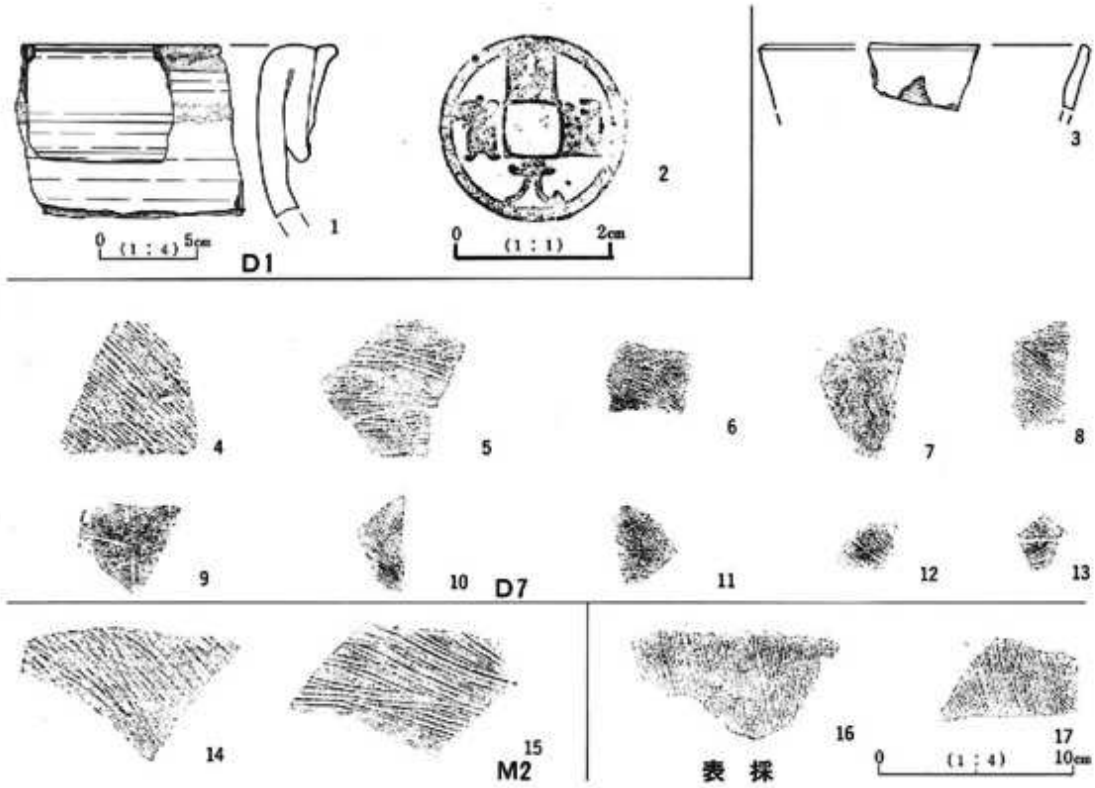
遺構（第14図）

本遺構は調査区の南東、こ－2グリッド内から検出された。掘立柱建物址の一部と考えられるがこれに対応する柱穴は本調査区内からは検出されなかったため、全体構造については不明である。平面プランは径65cm内外の円形を呈し、プラン内南東側の位置に29×25cmの楕円形の柱痕を有する。出土遺物はなく、時期不明である。

第V章　調査のまとめ

本遺跡から検出された遺構、遺物については前章で詳述した。小範囲での調査であり、また、遺構は年代、性格ともに不明確なものが多いため、当遺跡群を含めた三河田地区一帯の遺跡についての詳細かつ総合的な予想はできかねるが、現状で得られた情報を的確に記載しておくことに重点をおいて、今後この周辺地域の調査研究の糧としたい。

まず、時代が推定し得る第1・7号土坑、第1号溝状遺構について考えてみたい。第1号土坑は出土陶磁器、貨幣から中世と推定される。683×480cmにも及ぶ大型の土坑であり、佐久市内で検出された中世遺構には類例をみない。機能面については資料増加を待って検討すべきであろう。第7号土坑は出土遺物から弥生時代中期と考えられる。胴部の断片資料であるため前半の所産か、後半の所産か明確な判断はできないが、条痕文的な櫛描斜走直線文の甕、また、縦あるいは横羽状に組まれない斜走直線文の甕が主体を占める傾向は北西ノ久保遺跡の栗林II式を中心とする甕の一群にはみられないことから、これらの土器は栗林II式に先行する可能性のある土器と仮定しておきたい。本遺跡の東方約1km離れた地域には佐久地方の栗林式最古と考えられる土器を出土した深堀遺跡があり、今後、本遺跡から深堀遺跡周辺にかけて栗林式土器古段階の遺構・遺物が検出されることも十分予想される。第1号溝状遺構は時期判定に有効な遺物がないが、覆土の類似性から第7号土坑に近い時期と考えておきたい。その他、第2～6・8・9号土坑は東西の直線状に並ぶ位置関係、覆土の類似性、円形・楕円形のプラン、規模・形態が近似することなどから、近接した時代に構築され、また、相互に関連をもっていた可能性の強いものと判断したい。人骨・貨幣は遺存していなかったが、第4号土坑の2段構築は江戸時代墓壙の北西ノ久保遺跡第2号特殊遺構内C土坑の形態と酷似しており、墓址と性格づけられる可能性が強い。この他の土坑も墓址と仮定するならば、本調査地区南端部一帯は近世前後の墓域であったと考えることもできる。この問題については、近隣の習俗・伝承など民俗学的な見地も混じえて、機会を改めて考察したい。



第15図　梨の木遺跡出土遺物実測図

第2表　梨の木遺跡出土土器観察表

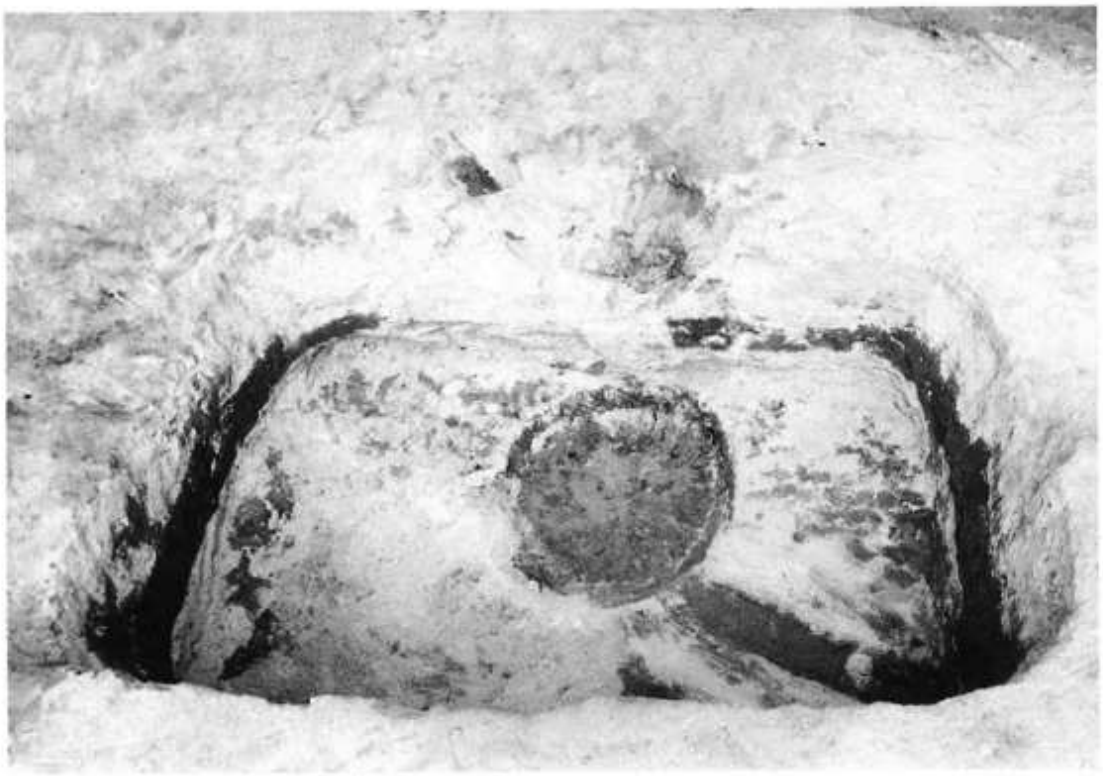
掲載番号	器種	法量	成形及び器形の特徴	調整	備考
15－1	常滑甕	三	口縁部断面が「N」字形を呈し、かなりの大型品である。		D1 フク土 破片実測B 14・15世紀
15－3	弥生壺鉢（？）	(17.0) (3.1) —	口唇部は面取りされ、口縁部はほぼ直線的な立ち上がりを示す。	内・外面ともに丁寧な横位のヘラミガキが施されている。	D7 フク土 1層 破片実測A

掲載番号	器種	部位	文様	備考
15－4	弥生甕	胴部	条痕文的な櫛状工具による斜走直線文が施されている。	D7 フク土 1層
15－5	弥生甕	胴部	櫛描斜走直線文が羽状を意識して施されているようであるが明確でない。	D7 フク土 1層
15－6	弥生甕	胴部	細かい単位の櫛描斜走直線文が施されている。	D7 フク土 1層
15－7	弥生甕	胴部	単位の不明確な、櫛描文が格子目状に残く施されている。	D7 フク土 1層
15－8	弥生甕	胴部	櫛描斜走直線文が羽状を意識して施されているようであるが明確でない。	D7 フク土 1層 15－5と同一個体と考えられる。
15－9	弥生甕	胴部	1本1本の単位が不揃いの櫛描文が散糸、不整な方向で施されている。	D7 フク土 1層 煤の付着が著しい。
15－10	弥生甕	胴部	櫛描斜走直線文が施されている。	D7 フク土 1層 15－5・8と同一個体（？）
15－11	弥生甕	胴部	細かい単位の櫛描斜走直線文が施されている。	D7 フク土 1層 15－6と同一個体と考えられる。
15－12	弥生甕	胴部	櫛描斜走直線文が施されている。	D7 フク土 1層 15－5と同一個体（？）
15－13	弥生甕	胴部	櫛描斜走直線文が施されている。	D7 フク土 1層 15－5と同一個体（？）
15－14	弥生甕	胴部	条痕文的な櫛状工具による斜走直線文が施されている。	M2 フク土
15－15	弥生甕	胴部	櫛描斜走直線文が施されている。	M2 フク土
15－16	弥生甕	胴部	櫛描斜走直線文が施されている。	表採 煤付着
15－17	弥生甕	胴部	櫛描斜走直線文が施されている。	表採 煤付着 15－16と同一個体

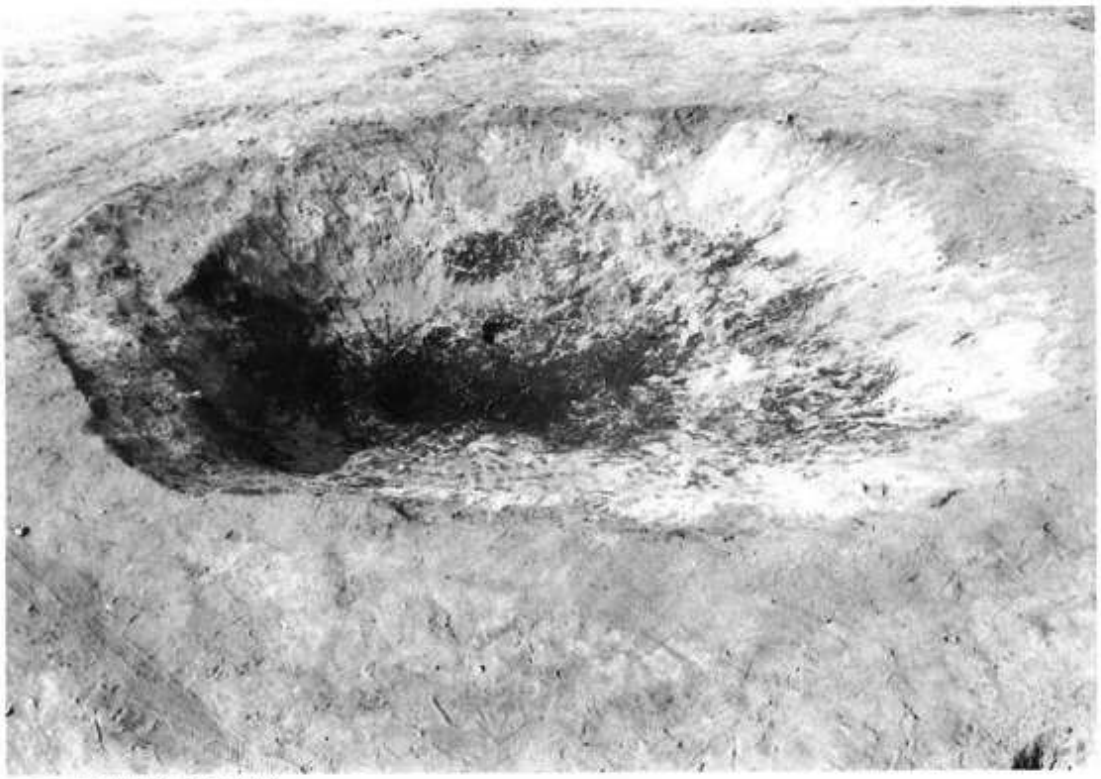
1．梨の木遺跡を三河田大塚古墳頂部より眺む。

2．梨の木遺跡全景

図版二



1．第1号竪穴状遺構（西方より）



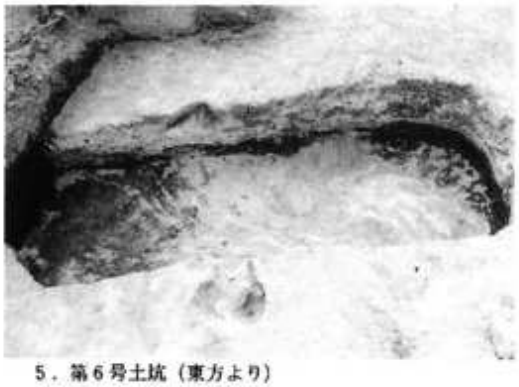
2．第1号土坑（南方より）

1．第4号土坑（南方より）

2．第2号土坑（西方より）

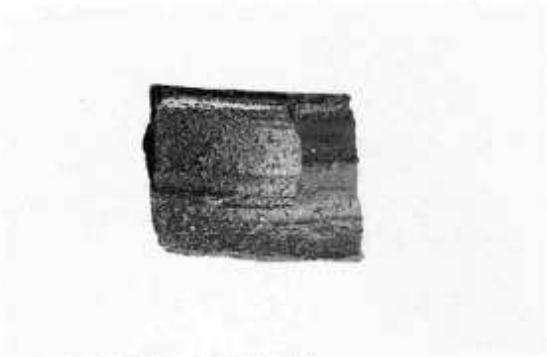
3．第3号土坑（南方より）

4．第5号土坑（南方より）



5．第6号土坑（東方より）

図版 四



1．第1号土坑出土常滑甕の破片

2．第1号土坑出土唐銭（開元通宝）

3～6．発掘調査スナップ

佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第1集	『西裏・竹田峯』
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第2集	『池畑・西郭堂』
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第3集	『芝　　間』
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第4集	『新　町　Ⅱ』
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第5集	『宿上屋敷、下川原・光明寺』
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第6集	『浦瀬・屋敷前・西片ヶ上・曲尾Ⅲ・曲尾Ⅰ』
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第7集	『高師町・西大久保』
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第8集	『北西ノ久保』

佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書第9集

長野県佐久市中原遺跡群　梨の木遺跡

1987年11月

編集者　佐久埋蔵文化財調査センター

発行者　長野県佐久市教育委員会

印刷所　株式会社佐久印刷所